

スタディスキルの養成に関する研究

——授業評価アンケートによる改善内容の把握——*

楠木 佳子**・杉田 洋***

(平成23年10月21日受付)

A Study on the Training of Study Skills —— Class Improvement based on Student Class Evaluation ——

Yoshiko KUSUNOKI and Hiroshi SUGITA

(Received Oct. 21, 2011)

Abstract

In the Department of Environmental Design and Department of Regional Environment Studies, a freshman orientation class for training students' study skills was introduced during the first semester from 2007 to 2009, and a similar program has been offered as a common subject of HIT since 2010.

In this study, the results of student class evaluation of 2007 and 2008 have been analyzed. For each of the eight basic study skills, such as "reading", "writing", and so on, the relative analysis of "understanding" and "improvement" and that of "improvement" and "effort" have been examined. In addition, from the relative analysis of "understanding" and "improvement", the eight skills have been classified into four groups. As a result of the analysis, some of the skills are classified into the group of "teaching and training required skill". It has become clear that, for those skills, an improvement plan for the class content is required.

Key Words: freshman orientation class, study skills, class evaluation, students' understanding, class improvement

1. 序

大学における学問とは、積極的かつ自主的に行われるべきものである。また4年間、専門、教養の内容を学ぶためには、大学生として、基本的な学習方法を身につけなければならない。

しかし昨今、入学生の学習歴は多様であり、多くの大学では、彼らが学習に要する基礎的なスキル(スタディスキル—読む、書く、調べるなど—)を、入学時にどの程度身

につけているのかを把握したうえで、その養成を目的とした初年次教育を展開している。

このような現状を踏まえ、広島工業大学環境学部社会環境系では、入学生が大学で学ぶために必要となるスタディスキルの養成を、1年次の前期科目「オリエンテーションゼミナール」の一部で平成19年度から平成21年度まで実施した。平成22年度からは、同様の全学共通科目「初年次セミナー」が開講されている。

本研究は、平成19年度、20年度に社会環境系で開講され

* 本授業の実施に向けたワーキンググループのメンバー、黒岩俊介先生(元 広島大学環境学部教授)、前田真子先生(元 広島大学環境学部講師)に謝意を表す。また授業の運営にあたり、環境デザイン学科、地域環境学科(旧社会環境系)の教員の皆様には貴重なご意見を頂いた。ここに謝意を表す。

** 広島工業大学環境学部環境デザイン学科 y.kusunoki.my@it-hiroshima.ac.jp

*** 広島工業大学環境学部環境デザイン学科 h.sugita.b3@it-hiroshima.ac.jp

たスタディスキル養成に関する授業で実施した学生による評価アンケートを分析し、学生のスタディスキル習得の状況を把握するとともに、今後の初年次教育関連科目の実施において授業改善が必要な内容を明らかにする。

2. スタディスキルの養成を目的とした授業の概要

(1) 実施体制

スタディスキルの授業は、「オリエンテーションゼミナール」(全15回)の後半8回で実施した。

この授業実施に向けて、社会環境系(環境デザイン学科)の教員4名によるワーキンググループを平成18年の冬に立上げ、授業内容、実施計画および評価体制について検討を重ねた。

ワーキンググループの検討により、授業は、1クラス約40人の3クラス編成で実施することとし、1クラスを2名の教員が担当するチームティーチング方式を導入した。チームティーチング導入の狙いは、教員が相互に教材配布や学生の学習活動の補佐を行いながら、円滑に授業を進行することにある。なお、8回の授業をテーマ別に3クールに分け、教員はクールごとに交代した。

クラス相互における授業内容の統一に向けた取組として、各回の内容および進行の時間配分などを記載した「授業実施マニュアル」をワーキンググループで作成した。また同グループでは、指導方法の統一を図るために、担当教員を学生に見立てた模擬授業を実施している。

さらに同グループでは、授業で用いる各種ワークシートの採点に必要な評価基準を具体的に設定し、全クラスを統一の基準で評価するための「採点マニュアル」も作成している。

(2) 評価体制

ワーキンググループでは、授業内容の自己点検評価サイクルについても検討し、本授業は2年間の実施結果を3年目に分析して、その後の授業計画に反映させるPDCAサイクルを導入した。

したがって本授業は、平成19年度、20年度の2年間、教材や授業内容に極力変更は加えず実施している。

(3) 授業内容

学習技術研究会が大学での学習に必要なスタディスキルとしてあげる9つのスキルを参考に、本授業では、表1に示す8つのスキルを習得目標として設定している。

表1 養成スキル

No.	養成スキル	No.	養成スキル
1	ノートをとる	5	読む
2	聴く	6	書く
3	考える	7	調べる
4	疑問を持つ	8	整理する

クールのテーマと授業内容を表2に示す。

表2 クールのテーマと授業内容

テーマ	授業	内 容
【第1クール】 ノートをとる	第1回	スタディ・スキル9つの力(必要スキルの説明)
	第2回	ノートをとる(模擬授業の実施)
	第3回	復習(大学の講義のうけかたについてのまとめ)
【第2クール】 読む・まとめる	第4回	効率の良い読み方(各種文章の読み方)
	第5回	読んでまとめる(要約文の書き方)
	第6回	復習(要約文のテスト)
【第3クール】 調べて書く	第7回	調べる・整理する(図書館、インターネットの利用法)
	第8回	レポートの作成(収集した資料のまとめかた)

テーマは、第1クール「ノートをとる」、第2クール「読む・まとめる」、第3クール「調べて書く」である。各授業における養成スキルの対応を表3に示す。

表3 各授業における養成スキルの対応

テーマ	授業	養成スキル							
		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
【第1クール】 ノートをとる	第1回	○	○	○	○	△	○	△	△
	第2回	◎	◎	○	○	△	○	△	△
	第3回	○	○	○	○	△	△	△	△
【第2クール】 読む・まとめる	第4回	△	○	○	○	◎	○	△	△
	第5回	△	○	◎	◎	◎	◎	△	△
	第6回	△	△	◎	◎	◎	◎	△	△
【第3クール】 調べて書く	第7回	○	○	○	○	△	△	◎	◎
	第8回	○	○	○	○	○	○	◎	◎

◎：非常に関連がある ○：関連がある △：あまり関連がない

(4) 出席状況

平成19年度、20年度に実施したスタディスキルの授業、各年度8回の出席状況を、欠席した回数ごとで集計した。各年度における欠席回数ごとの学生数と累積割合を図1に示す。いずれの年度も欠席回数3回以下が受講者の8割を占める。

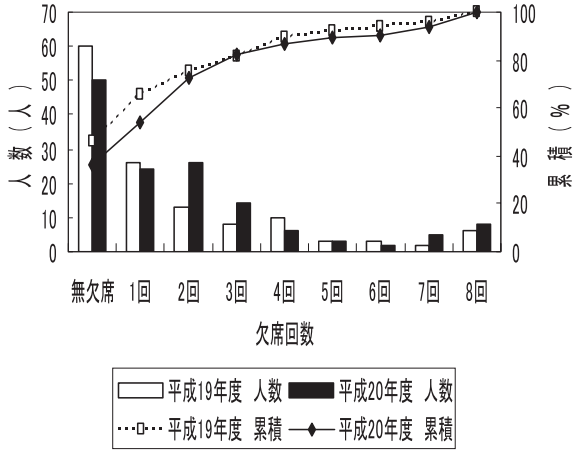


図1 欠席状況

3. 授業評価アンケートの概要

アンケートは、平成19年度、20年度ともに第3クールの最終回に実施した。有効回答数は平成19年度が95名、平成20年度が107名である。なお調査は無記名式である。

設問は、「①各スキルの理解度に関する質問（8問）」、「②各スキルの向上度に関する質問（8問）」、「③授業全般に関する質問（6問）」の3グループ計22問で構成されている。以下に詳細を記す。

「①各スキルの理解度に関する質問」では、表1に示した各養成スキルについて、どの程度理解できたと思うかを「非常に思う」—「まったく思わない」の7段階で回答を求める。

「②各スキルの向上度に関する質問」では、同じく表1の各養成スキルについて、どの程度向上したと思うかを「非常に思う」—「まったく思わない」の7段階で回答を求める。

「③授業全般に関する質問」では、表4に示した内容について「非常に思う」—「まったく思わない」の7段階で回答を求める。

4. 授業評価アンケートの分析

(1) 授業への取組姿勢および授業の有益性

授業全般に関する質問は、表4に示すとおり、授業への取組姿勢および授業の有益性などについて問うている。

授業全般に関するアンケート結果を図2に示す。なお、平成19年度と20年度については、自己点検評価サイクルの原則に基づき、教材や授業内容に極力変更は加えず実施し

表4 授業全般に関する質問

設問内容	略語
目標達成のために努力した	努力した
目標が達成でき、十分な力がついた	力がついた
他の授業や自学自習に役立つ	自学自習に役立つ
学生生活や社会生活に役立つ	学生・社会生活に役立つ
他の科目が好きになった（あるいは理解しやすくなった）	他の科目が好きになった
1年生にとって当授業が必要だと思う	この授業は必要だと思う

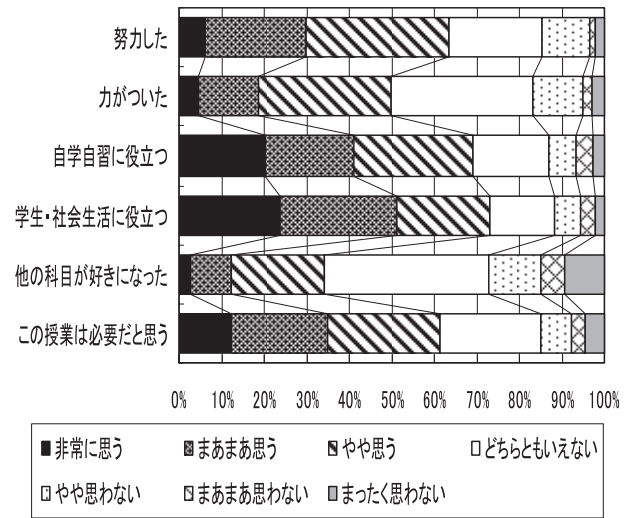


図2 授業全般に関するアンケート結果

ている。したがって以降においては、平成19年度と20年度の結果を合わせて集計・分析する。また図中のタイトルは表4の略語と対応している。

図2をみるならば、「自学自習に役立つ」「学生・社会生活に役立つ」「この授業は必要だと思う」といった、本授業の有益性に関する質問について、いずれもプラス側の評価をした学生が過半を占める。しかし「力がついた」と感じている学生は少なく、力がついたと感じていなくても、授業自体に有益性を感じていることがわかる。

(2) 理解度

各スキルに対する学生の理解度について、平成19年度と20年度を合わせて集計した。結果を図3に示す。

いずれのスキルも、理解できた側に評価をしている学生が全体の7割を占める。

次に授業への取組姿勢と理解度の関連を明らかにするため、図2に示した「努力した」に対する回答段階ごとに、理解度の平均評価得点****をそれぞれ算出した。結果を図4に示す。

**** 理解度および向上度の平均評価得点を算出するにあたり、「まったく思わない」を1点、「まあまあ思わない」を2点、「やや思わない」を3点、「どちらともいえない」を4点、「やや思う」を5点、「まあまあ思う」を6点、「非常に思う」を7点に得点化した。

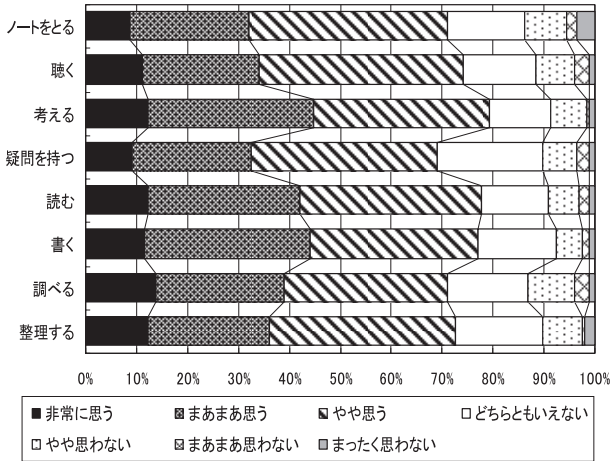


図3 理解度

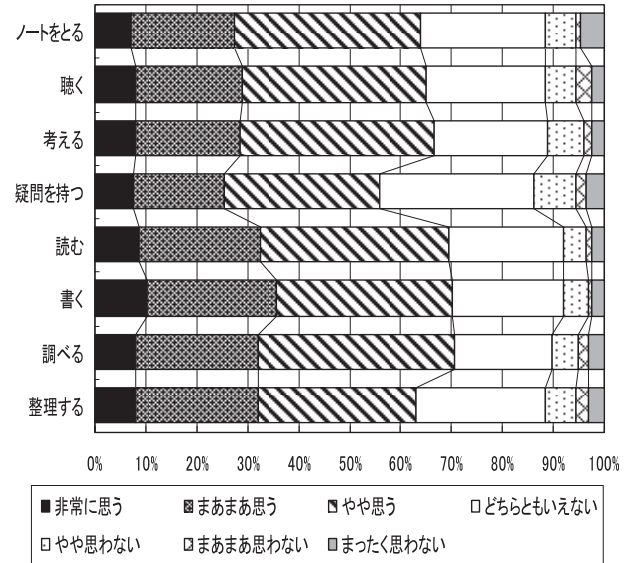


図5 向上度

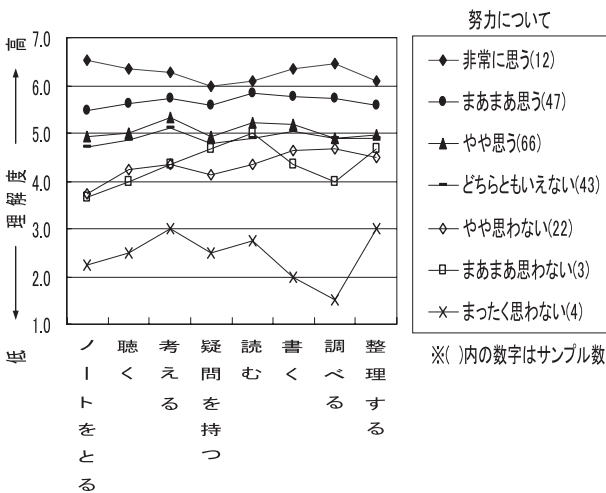


図4 理解度と努力度の関連

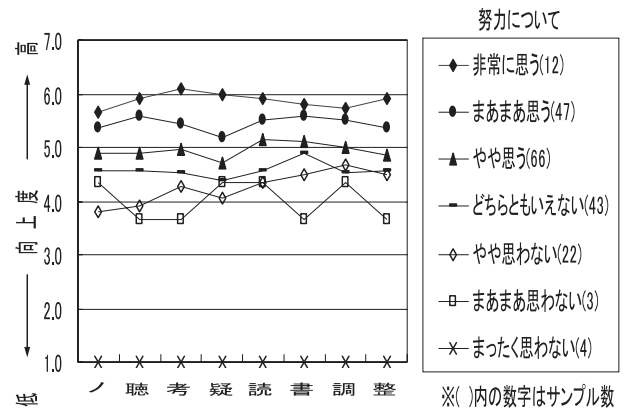


図6 向上度と努力度の関連

同図をみるならば、いずれのスキルも、本授業の目標達成のために努力した学生ほど理解度が高いことがわかる。すなわち、理解度を高めるためには、学生自身の努力が必要である。

(3) 向上度

各スキルに対する向上度について、平成19年度と20年度を合わせて集計した。結果を図5に示す。

いずれのスキルも、向上した側の評価が過半を占める。なかでも「読む」「書く」「調べる」といったスキルについて「向上した」と感じている学生は多く、全体の7割を占める。

次に授業への取組姿勢と向上度の関連を明らかにするため、図2に示した「努力した」に対する回答段階ごとに、向上度の平均評価得点****を算出した。結果を図6に示す。

同図をみるならば、理解度と同様、いずれのスキルも、本授業の目標達成のために努力した学生ほど向上度が高い傾向が認められる。すなわち、向上度を高めることと学生の努力には強い相関関係があるといえる。

**** p. 75 脚注 **** を参照のこと。

(4) スキル習得状況および授業改善の内容把握

ここでは、理解度と向上度の関連を明らかにするため、横軸に理解度、縦軸に向上度を取り、各スキルにおける両評価の平均評価得点を布置した。結果を図7に示す。

図7をみるならば、各スキルにおける理解度、向上度の平均評価得点は、いずれも7段階評価の中位である4.0を上回っており、概ね、プラス側の評価を受けていることがわかる。

本研究では、各スキルの養成について更なる充実を図るために、両評価の相対的な位置付けから、8つのスキルのなかでより指導が必要なスキル、あるいは授業内容の改善が必要なスキルの把握を試みる。

分析にあたり、各スキルの理解度、または向上度の平均評価得点をそれぞれ平均し、その値を図7に「平均ライン」として破線で示した。これは各スキルの位置付けを判断す

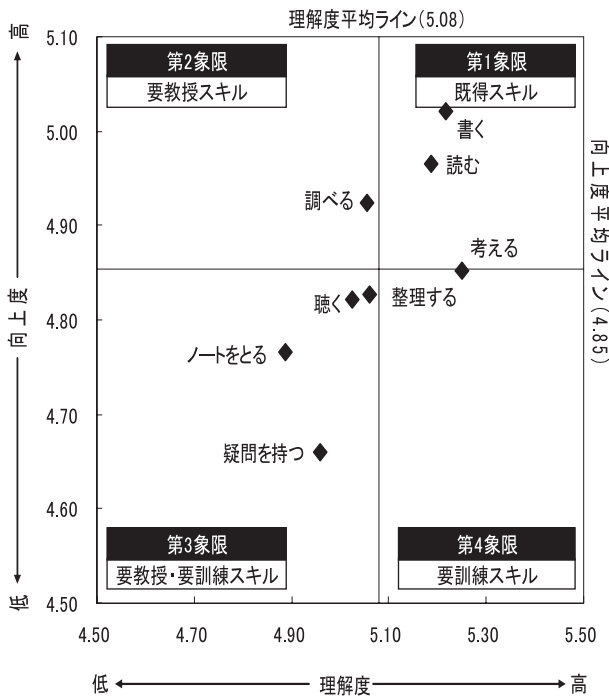


図7 理解度と向上度の関連

るための基準と捉えることができる。

すなわち、理解度、向上度それぞれの平均ラインにより分割された4つの象限は、右上から逆時計回りに第1象限「相対的に理解度・向上度が共に高い」、第2象限「相対的に理解度は低いが、向上度が高い」、第3象限「相対的に理解度・向上度が共に低い」、第4象限「相対的に理解度は高いが、向上度は低い」という意味をもつ。また図7において、理解度が低いスキルは、今後さらに教授する内容を充実すべきスキルであることから「要教授スキル」、向上度が低いスキルは、今後さらに訓練が必要であることから「要訓練スキル」と解釈する。なお理解度、向上度が共に高いスキルは、すでに習得しているスキルであることから「既得スキル」と解釈する。

したがって、第1象限に布置されたスキルを「既得スキル」、第2象限に布置されたスキルを「要教授スキル」、第3象限に布置されたスキルを「要教授・要訓練スキル」、第4象限に布置されたスキルを「要訓練スキル」とみなす。

これにより、「書く」「読む」の2つのスキルは「既得スキル」、「調べる」は「要教授スキル」、「整理する」「聴く」「ノートをとる」「疑問を持つ」の4つのスキルは「要教授・要訓練スキル」と判断する。

ここで、相対的な位置付けから、より重点的な教育が必要であり、授業改善の優先度が高いスキルを判断するならば、理解度・向上度が共に低い「要教授・要訓練スキル」であり、これら第3象限に布置された4つのスキルについては、授業内容の検討と改善を優先的に図る必要がある。また、理解度および向上度は、受講生の取組姿勢との関連

が認められることから、受講生の努力を促す方策についてもあわせて検討すべきである。

5. 結語

本研究では、広島工業大学環境学部社会環境系にて実施した、平成19年度、20年度のスタディスキル養成に関する授業（3クール全8回）の授業評価アンケートの結果の分析から、今後の初年次教育関連科目の実施において必要となる基礎的な知見を得た。

得られた知見を以下に示す。

スタディスキルの養成において、読む、書く、調べるなどの各スキルに対する理解度および向上度と、受講生の取組姿勢の関連について分析した結果、いずれのスキルも、本授業の目標達成のために努力した学生ほど理解度、向上度が高いことを明らかにした。

理解度と向上度の関連分析では、8つのスキルそれぞれについて、両評価の平均評価得点を算出し、両評価の相対的な位置付けから、それぞれのスキルを「要教授スキル」、「要訓練スキル」、「既得スキル」、「要教授・要訓練スキル」に分類し分析を進めた。

分析により、理解度・向上度が共に低いスキル「要教授・要訓練スキル」には、「整理する」「聴く」「ノートをとる」「疑問を持つ」が該当しており、今後のこれら4つのスキルについては、授業内容を検討する優先度が高いことを明らかにした。また、理解度および向上度を高めるためには、受講者の努力を促す方策についてもあわせて検討する必要がある。

最後に、本研究の成果を踏まえ今後の課題について述べる。

本研究の目的は、大学入学時の学生のスタディスキル習得状況の把握と、今後の初年次教育関連授業の実施に際して必要となる基礎的な知見を得ることにある。現在、「初年次セミナー」は全学共通のクォーター科目として開講されているが、授業内容の詳細に関しては学科の担当教員に任されている。今後も全学的にはもちろん、まずは学科、各教員単位で実施と分析のサイクルを繰り返し、継続的な授業改善を行っていく必要があると考える。

またスタディスキル養成において、クォーター（全8回）といった短期間での養成の限界についても検討していく必要がある。すなわち本研究で明らかにした、学生におけるスタディスキル養成の必要性に対する高い認識を、「初年次セミナー」終了後の「キャリアデザインⅠ」及び専門、教養の各講義へどのようにリレーションするか、その具体的な方法論を含めた更なる検討が引き続き必要である。

文 献

学習技術研究会（編）『知へのステップ 改訂版』くろしお出版（2006）